

---

きには必ず買うことにしていた。食の細くなった母は、私の差し出した焼きいもを嬉しそうに受け取ったものの、ほんの少ししか食べることができなかった。

次第に病気が重くなり、私がいくら「ほら、お母さんの大好きなおいもよ」と差し出しても、首を横に振り、いらないという母を見て私は胸がはり裂けそうだった。あれほど好きだったさつまいもなのに。そのとき、私はいやでも母の死期の近いことを覚悟したのだった。

先日、沖縄に旅する機会に恵まれた。沖縄

で出会った紫色のさつまいもにはびっくりした。その紫色のさつまいもを蒸してつぶして、ダンゴにして、周りにゴマをまぶして油で揚げたお菓子を買ってみたが、素朴な美味しさだった。早速おみやげにこのさつまいもを買って帰った。母が生きていたら目を丸くしただろうに。紫色のさつまいものお菓子を亡母の写真に供えた。

母の血筋を受け継いで、私も、私の娘も、そして飼っているイヌまで、我が家はみんなさつまいもが大好きな家族である。

(江川 洋子／主婦)

---

## サツマイモ資料館長の日記より (5)

井 上 浩

---

薩摩大使と彩<sup>さい</sup>の国大使 (1993年12月10日)

東京の浅草<sup>あさくさ</sup>にわが国最大の甘藷問屋、「川小商店」がある。数年前、この齋藤興平社長から、「わたしは鹿児島県の薩摩大使でもあるんですよ」と、そうある名刺をもらったことがある。

また同じ頃、イモ焼酎の研究者として有名な川越の菅間誠之助先生からも、「わたしは薩摩大使です」と言われたことがある。鹿児島県は面白いことをやっているなと思っていた。ところがこの制度は鹿児島だけのものではなかった。とくにさいきんは「ふるさと大使」を設ける県が続出し、大使の数も急増中という。平成5年11月24日の朝日新聞夕刊は、「ふるさとよ『大使』を抱け」の見出しで、県別の大使の愛称、発足時期、数の一覧表を掲げ、こうした新しい動きを紹介した。首都圏や近畿圏などの大都市圏に住んでいるそれ

ぞれの県の関係者に大使になってもらい、県のPRをやってもらっているのだという。

現在は北は青森から南は沖縄までの17県が「ふるさと大使」を置いている。その最初が鹿児島県だったわけで、愛称も「薩摩大使」。発足は10年前の1983年。以来、年々大使をふやし、今では1000人以上に達している。そして「サツマイモ大県」らしく、サツマイモ関係のめばしい人たちにも大使になってもらっているようだ。

こうした動きを見て多くの県が追随したわけだが、わが埼玉県はどうなっているのだろう。特徴らしい特徴がなく、東京のベッドタウン地区に甘んじている県のことだ、そういうものはなかろうと思っていたが、念のため、その一覧表を見て驚いた。埼玉にもちゃんとあるではないか。もっとも1993年2月からとあるから、まだ1年もたっていない。それに

## バレイシヨ増収一〇〇〇問答

■三百回余りの講演で、いも作従事者からいただいた千四百余の質問を整理し、これに回答。基本から植付け、収穫・防除までを解説し、厳しさが加わる現代農家に大きな指針を示す好著。元北大助教授・吉田稔著 定価七〇〇円 送料二五〇円

## 清薯源流の砦

■現在の種苗管理センターのいも作関係は、昭和二二年に創設された「馬鈴しょ原種農場」がその出発である。各農場の歴史と現況の報告書。いも類振興会編・定価七〇〇円 送料二五〇円

## 21世紀に向けてのいも作り

■生涯を北海道のバレイシヨ作に投入した著者快心の著作。その視野は需要者の品質志向から国際競争力まで、イモ作従事者の今後の指針を示す。吉田稔著 定価六〇〇円 送料二五〇円

## アンデスから食卓まで

■ジャガイモのふるさとアンデスから出発し、その料理法や品種の特性、栽培から食卓への供給までを、オールカラーで紹介。田中智著 全改訂 定価五八〇円 送料一七五円

## 熱帯アジアの馬鈴薯生産

■東南アジアの馬鈴しょ生産の実態を、各国のレポートから翻訳した貴重な資料。わが国馬鈴しょ作に大きな示唆を与える。秋元喜弘著 定価八〇〇円 送料二五〇円

## 甘しょ・ばれいしょ・おいも全書

■斯界の権威による今日のおいも百科。  
香川綾 監修 定価三五〇〇円 送料四五〇円

数が極端に少なく、今の所は1団体と個人7人だけ。団体はサッカーの「浦和レッズ」。個人はオペラの佐藤しのぶさんやヒマラヤ登頂などで有名な田部井淳子さんなどだ。

もっともそんな詳しいことは新聞にはない。それを知ったのは今日が初めてだった。埼玉県さいの県民部イメージアップ推進室発行の『カラフル』の第2号で私はそれを知った。

「彩の国大使」による「おいしい話」の特集号で、川越在住の登山家、田部井さんのエッセイもあった。題して「川越イモ、エベレストに登る」。彼女はの中で登山家の携帯食のことを書いている。軽くて、いたまないありがたいものの一つとして、干し芋と川越名物のイモせんべいをあげている。その反対にイモ菓子はイモあまなっとう。うまいが重いのが問題だ。ただ仲間が当てにしているので、ほんの少しだけ、貴重品として持っていくことにしているのだという。

そのためこれらのイモ菓子はみんなエベレストに登った。イモの町、川越の人ならではの話だ。

### 編集後記

慢性飢餓大陸アフリカへ各国から善意の食糧が送られています。コメ・コムギの味に慣れた民は雑穀など古来よりの食物を敬遠する向きもあるとか。日本人のタイ米への反応と一脈通ずるものがあるようですが、もし数少ない食糧輸出国群が凶作に見舞われたらどうなるのでしょうか。援助のありかた、今後の世界的食糧需給の難しさをつくづくと感じさせるこのごろです。

### いも類振興情報 第40号

平成6年7月15日発行

発行所 財団法人 いも類振興会  
東京都港区赤坂6-10-41  
ヴィップ赤坂303号室  
電話 03-3588-1040  
振替 00130-1-110152  
印刷所 交通印刷株式会社